

目次

巻頭言.....一

漢語「善悪」「是非」「決定」「必定」の副詞用法について.....原 卓志.....五

慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』出典攷.....山本 真吾.....三

——類聚名義抄からの引用を中心として——

『三帖和讃』のシムについて.....来田 隆.....五

延慶本平家物語の「ムズ」小考.....菅原 範夫.....七

法華百座聞書抄における助詞——「へ」と「に」の使い方——.....井上 親雄.....六

光明真言土沙勸信記における声調変化について.....榎木 久薫.....一〇四

——呉音去声字の上声化についての考察——

久遠寺蔵本朝文粹清原教隆点の訓法について.....山本 秀人.....一三七

——助字の訓法を中心に——

専修寺蔵『唯信鈔』総索引稿・正月廿七日本『唯信鈔文意』総索引稿.....金子 彰.....一五

東大寺図書館蔵『新修浄土往生傳』影印並びに訓読文.....宇都宮啓吾.....二四九

## 慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』出典攷

— 類聚名義抄からの引用を中心として —

山本真吾

## 目次

はじめに

一、慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』について

二、出典の検討

三、『略注』に引用された類聚名義抄  
むすび

## はじめに

類聚名義抄に関する研究は、長年に亘つて数多くの成果が積重ねられて来た。日本語史研究の一領域たる辞書史の上で、これを軸とした従来の研究のあり方は、極く大雑把には次のように分類することが可能のように思われる。

一、成立に関する研究——類聚名義抄がどのようにして成立したか。ここには、(1)成立時期・編纂者、又編纂の意図・目的について考究することはもとより、(2)系統研究。諸本を種々の観点より比較することによって原撰本たる図書寮本から改編本系諸本への発達経路を説明しようとする研究<sup>(2)</sup>、そして(3)出典研究。前代の辞書の影響を如何ように受けたかという古辞書間の問題<sup>(3)</sup>と広く前代の古文献の字句、音訓を如何に摂取したかを具体的に考えようとするもの<sup>(4)</sup>があつて、

このように凡そ(1)~(3)の三つの柱を認めることができよう。

二、影響に関する研究——類聚名義抄が後の文献にどのような影響を与えたか。これも、(1)後代の辞書への影響を論ずる古辞書間の問題と<sup>(5)</sup>、(2)これがどのようにに流伝・利用されたかを辞書以外の他文献に引用された逸文などの蒐集・検討によつて考えようとする研究<sup>(6)</sup>がある。

右の分類に基くそれぞれの研究課題は、勿論互いに密接に関連するものであるし、又、これはひとり類聚名義抄にとどまるものではなく、他の古辞書の研究についても概ねあてはまるものと思われるが、就中、類聚名義抄に関しては、各項の研究がそれぞれに精密の度を加え、大幅な進展を遂げているのである<sup>(8)</sup>。

本稿も、かかる先学の驥尾に附して、右の二・(2)の課題について、『遍照發揮性霊集』の注釈活動に類聚名義抄が利用された一事例を報告しようとするものである。具体的には、標題に掲げた慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』に改編本系類聚名義抄からの引用がなされていることを指摘し、若干の考察を加えようと思う。

## 一、慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』について

弘法大師空海の詩文を高弟真濟(八〇〇—八六〇、高雄僧正とも)が編集した『性霊集』(詳名『遍照發揮性霊集』)の注釈活動は、平安時代末期より今日に至る迄行われていて、中世迄(室町時代迄)に限つても、次の如く多くの注釈書の存在が知られている<sup>(9)</sup>。

① 顕鏡鈔 三卷 写本 京都東寺所蔵 仁和寺濟暹注。

② 性霊集略注 十卷二帖 写本 慶応義塾図書館蔵 嘉元四年写。

③ 性霊集緘石鈔 六卷本・十卷本の二部 写本 種智院大学所蔵 泉宝注。

④ 性霊集抄註 九卷(卷三欠) 写本 名古屋真福寺所蔵 永和三年写。

慶応義塾図書館蔵『性霊集略注』出典攷